

心理学における質的研究法をめぐって

山下 栄一

1 質的研究法への関心の高まり

近年日本の心理学界でも、少しづつではあるが、質的研究に対する関心が高まりをみせている。筆者の身近にいる学生や院生たちの中にも、数量化の手法によらない研究で卒業論文や修士論文を作成しようとする者がしばしばみられるようになった。だが、学部の心理学専修における研究法に関わるカリキュラムは依然として実験法、数量化の手法の基礎を訓練する内容が主であり、質的方法についてはほとんど扱われていない。心理学に関する専門書について見ても、質的研究法を主題とした日本語で書かれた本はあまり出版されていないようである。

数量化の手法は確かに専門的な手ほどきを受けなければ、ほとんど手をつけることさえ無理という趣きがある。それに対して質的方法はいわば「常識」に近い方法であるため、特に専門的訓練は必要ないように見える。実際、とにかく用いてみるというだけなら、何ら特別の訓練を受けていなくても、研究らしきことに手を染めることは可能なのである。だが、いわば「常識に近い手法」であるが故に、質的方法によって専門的研究として評価するに値する論文を作成することは実は容易ではない。したがって、本来ならば質的研究法についても、その基礎的な学習は学部段階で行っていくことが必要ではないかと考えている。少なくとも筆者は、この数年、卒業論文や修士論文を指導する経験の中でその必要を強く感ずるようになってきた。できれば筆者自身で、質的研究法に関する入門書でも作ればよいのだが、まだそれだけの準備ができていないというのが正直なところである。

若い世代の研究者にそうした労作を期待しながら、筆者なりに長年心理学の研究のあり方について考えてきたことの一部を記しておきたいと、この小論の作成にとりかかったのであった。小論の作成作業を進めていくうちに、様々に新たなことが見えてきたように感じられた。そんな事情から、この小論のタイトルを表記のように決めたのである。その趣旨は、質的研究法のあれこれを紹介したり、その個々の手法のマニュアル的な解説を行ったりするのではなく、近年における質的研究法への関心の高まりという心理学の世界における出来事が時代状況の中で意味するものを筆者なりに探っておきたいということである。あわせて質的研究の具体化の一つとして筆者なりに模索してきた一人称的経験を資料とする研究法についても若干触れておきたい。

2 どんな研究法が取り上げられているのか

近年の心理学で関心をよんでいる質的研究法とは具体的にどんなものかを、まず一通り見ておく必要がある。その手掛かりとして、たまたま筆者の手元にある2～3の英文で書かれた文献を見ていくと、まず、「質的研究」とは何かについてのいわば定義としては、2000年に発行された心理学百科事典に次のような記述が見つかった。(注1) すなわち「質的研究とは、もっとも広義には、記述的データを生み出すような研究をいう」のである。それは単に「数量的データ」を用いない、ということにとどまらず、人間と社会に対するひとつの独自のアプローチ

だこと変わった上で、その独自のアプローチの主要な特質を7つ程の項目に整理している。

次にそのように定義される質的研究の具体的方法としてはどんなものに関心が向けられているかを見るため、J.T.E.Richardsonの編集になる『心理学及び社会科学のための質的研究法ハンドブック』を繙いてみると、初めの方で方法的な主題を扱った後に具体的方法の種目としては、プロトコル分析 (protocol analysis)、グラウンディッドセオリー (grounded theory)、エスノグラフィ (ethnography)、談話分析 (discourse analysis) 等が検討の対象となっている。他方、2001年に出た J.McLeod 著の『カウンセリングと心理療法における質的研究』をみると、上記のもの共通しているのはグラウンディッドセオリー、談話分析、エスノグラフィ (エスノメソドロジー) であり、その他に物語分析 (narrative analysis) と現象学及び解釈学がとりあげられている。(注2)

これらのうち、グラウンディッドセオリーは、すでに1960年代に B.Glaser と A.Strauss によって創始されたものであり、社会学や社会心理学の領域でかなり多くの研究実績が積み重ねられてきているが、心理療法等の領域ではまだあまり用いられていないようである。またエスノグラフィもしくはエスノメソドロジーは主として社会人類学の領域で開拓されてきたものである。この両者はいずれも現象学が発想の基盤になっていたと指摘されているのが興味をひく。

こうした近年出た質的研究法についての文献を見ていて感ずるのは、ここに上げられているもの以外にも、質的研究法と呼んでよいものももっとあったはずだということである。たとえば、臨床心理やパーソナリティ心理学の分野で行われてきた事例研究もその一つであるし、青年心理学の領域で用いられた日記を資料とする研究などもそうである。そういえばかつてオルポートは個人的記録 (personal documents) によ

るパーソナリティ研究の方法という纏め方をしていたことも想起される。つまり従来も心理学において事実上は質的研究とよんでよいような研究もかなり行われていたのだが、わざわざ「質的研究」という呼称は用いられていなかったということである。そのところに実は重要な意味があるのではないだろうか。すでに上で引用した百科事典での定義にもあるように、ことさらに「質的研究」という表現を用いているのは、単に数量的手法を用いないというに止まらず、心理学研究に対する従来の考え方に対抗するといった意味あいが、そこに強く感じられるのである。実際百科事典の解説のところにあげられた質的研究についての7つ程のコメントを見てもたとえば「質的研究者は生活の中での事物に対して人々が付与する意味に関心を持っている」(第2項)とか、「質的研究の方法論では人及び人を捉える場面 (settings) を全体論的 (holistically) にみようとする。人々、場面、グループ等を単なる『変数』(valuables) に還元してはならないと考える。」(第4項)といった記述もなされているのである。こうした点に注目していくなら、従来心理学の世界を支配してきたパラダイムにとって代わる新たなパラダイムの登場という意義がはらまれているように思われる。

3 物理学的客観主義、実証主義の呪縛からの解放

大学の教養科目における領域区分において、心理学はしばしば「自然科学」として位置づけられてきた。そのことに端的に象徴されるように長い間主流とみられてきた現代の心理学は実質的内実は多岐にわたっていたとしても、自らの学問のとらえ方としては物理学を典型とする自然科学だとしてきたのではないか。自然科学としては、物理学、化学、生物学等に比しては

後発科学であり、19世紀の後半一応成立したといわれるようになってから後も、「心について、果して科学的に研究できるのか?」という周囲からの懐疑的な見方に対して絶えずたたかってきたともいえる。LeShan がいみじくも述べているように、心理学は、その実際の研究活動が始まる以前に、「とるべき方法」があらかじめ決まっているという、その意味でまことに奇妙な領域科学なのである。(注3)つまり、心理学は、「心」というまことにあいまいな対象について、物理学等に匹敵する精密な客観的方法によって研究を行うことを使命とする自然科学だという自己規定が、そもそもの発足の時からあったわけである。LeShan は、後発の科学であるがゆえに、少しでも早くアカデミズムの世界で市民権を得たいという動機が支配していたからと見ている。そうした近代心理学の学的性格が極端な形で展開したのが、20世紀の中頃一世を風靡した行動主義であったと考えてよいであろう。筆者が大学で心理学を学び始めたのはそうした行動主義の影響がまだまだ圧倒的に強かった、1950年代の終わりのことであった。当時、特に行動主義を標榜しているわけではない心理学者たちの間でも「心理学は行動の科学である」という定義は当然のように受け入れられていたのであった。

行動の科学たる心理学が具体的に目指すものは何か。そういう問いかけに対して、心理学者の方では一応それは行動の理解だと答えるのだが、ではその理解とはどういうことかとさらに問い続けていくと、それは「行動を予測し得る行動法則が得られていることだ」という回答が返ってくる。さらに予測可能な行動法則が得られているなら、それによって「行動の統御」が可能になるという議論が続けられていく。結局、行動の科学としての心理学は行動法則を見つけだし、それに基づいて行動を統御していくことが科学の存在意義だという理念に支えられてい

ることが見えてくる。これはまさに近代科学が等しく担ってきた「技術の学」という性格を心理学もまた持たされてきたことを雄弁に物語っているのである。行動統御の技術を提供していくことによって、心理学という科学はまさに「社会のお役に立てる」というわけである。後発科学としてのいわばコンプレックスにそもそもの発足以来悩まされてきた心理学は、自然科学の他の分野と同様に、精密な方法を駆使することによって行動法則を見だし、それに基づいて行動を統御する技術を社会に提供していくという、学問としての指導理念を有していると判断される。従って、精密な客観的方法を用いるということは、近代科学として心理学がアカデミズムの世界で市民権を得ていく不可欠の条件と捉えられていた。だからこそ、事実としては質的と呼んでもよい研究が行われていたとしても、それは研究全体が未だ進んでおらず探索的とも言うべき状態にあることを示すもので、研究が十分に進んだ段階では、当然数量的なデータによる仮説検証的研究が行われるべきだというわけである。

4 ポストモダンの心理学のあり方を模索する

筆者はかつて、現代心理学のあり方を批判する論考の中で、従来の近代科学としての心理学がいわば「技術の学」であったのに対して、それに対抗する科学としての心理学を「批判の学」として性格づけていくべきことを主張したことがあった。その時の思いは、人間存在のもっとも本質的な領域たる「心」についても、その機能に関する実験的な研究の対象とし、そこから得られた行動法則を用いて「心」のあり方を統御する技術を作りだしていくという人間の営みが進んでしまうと、それだけ人間のあり方そのものがもっとも深いところで歪められてし

まう。そのような心理学のあり方は深く掘り下げてゆくと近代社会のあり方そのものの特質を端的に示しているのだということが見えてくる。そこからむしろこれからの心理学は、近代社会が人間性に対してもたらしかねない歪みを正していく知見を提供してゆくことに意を注ぐべきではないか。その意味でこれから望まれる心理学は「批判の学」であるはずだと考えたのであった。(注4)

このような近代社会についての見方、そうした歴史の中で後発科学として進んできた心理学がある意味で技術の学であったという捉え方については、今も誤りとは考えていない。しかしその後様々な折に心理学の実際の有り様を冷静に見つめるという作業を続けてきた結果、事実としては、心理学はきわめて多様な様相を呈していることに気づいてきた。ポストモダンという問題提起に関しても、近代社会を超えていったいどういう社会を求めていくのかということに思いを致す時、そのキーワードとして個人の自由な選択に基づく多様なあり方というものゝ浮かび上がってくるのを感じとった。その点に依拠しつつ今後のいわばポストモダンの心理学のあり方を見通すためには、もう一度筆者なりの心理学研究の方法論についての枠組みを検討しなおす必要を感じたのであった。

これまで折にふれて行ってきた心理学の学問としての性格を検討する際、便宜上、指導理念、対象像、方法という3つの視点を用いてきた。たとえば19世紀における近代科学としての心理学の成立を規定していた指導理念は「少しでも早くアカデミズムの世界で一人前の科学としての市民権を得たい」というものであったと考えられる。その理念のもとにヴントの心理学における対象像は要素主義的に捉えられた「意識」であった。こうした指導理念と対象像に照応して方法については実験法が中心的なものと考えられていたわけである。一人前の近代科学とし

て認められたいという強い動機の故に、方法についての基準はできるだけ精密で客観的なもののみを認めるという制約が終始心理学研究者を支配してきたのがこの100年余りの心理学の歴史であったといわねばならない。そうした方法の基準が先にかかげられていたが故に、心をもっぱら行動としてのみ捉え、意識そのものさえ心理学の世界から締め出してしまったのが行動主義の立場であった。行動主義は1990年代にはほとんど克服されたといわれているが、それを支えていた方法論における客観主義、その具体化としての操作主義的思考方は、つい最近まで教育心理学や臨床心理学のような実践的領域にまで深く浸透していた。そのような心理学のあり方を批判しようとして筆者は先にもふれたように「技術の学」から「批判の学」へという形で、従来のもに代わる新たな心理学を模索してきたように思われる。だが、しばしばポストモダンといった言葉で論議される近代社会を超えた新たな人間社会のあり方を特徴づけるものは何かを真剣に考えていくと、上にみたような批判の内実そのものが問いなおされるべきではないかと考えられる。

現在筆者の考えているこれからの人類社会のあり方を端的に表現するなら「多元主義の社会」といえるのではないか。特に宗教についても、特定の宗旨宗派がそれぞれに自己のみが絶対に正しく、他は誤りだという態度を持するならば、まさに人類は人間の救済を掲げる宗教同士の争いによって悲劇的な滅亡への道をたどってしまうのはさげがたい。そこからまず、宗教的多元主義ということをもって筆者は主張したことがあった。(注5) 特定の宗旨宗派は、いかにその教義等が優れているとしても、それは人類共通の根源たる絶対者に至る「一つの道」なのだという立場である。こうした考え方に立つとき、心理学という学問についても「心」という人間存在のもっとも本質的な側面を研究対象

とするものであるがゆえに、それを解明していく方途はほとんど無限ともいべき多様な道が可能なのだと考えられる。こうしてこれからの人間社会を基本的に多元主義の社会と捉え、心理学という学問についてもそうした社会のあり方に照応した多様なあり方を積極的に認めていくという方向が見えてきたのであった。

そのあたりのところをもう少し具体的にみていくと、筆者がこれまで批判してきた行動主義に代表される「技術学」という方向をとる心理学も、当然「一つの可能なあり方」として認められるべきだということになる。同様に筆者が模索してきた現象学的人間学的な心理学という方向も「もう一つのあり方」として認められるべきものということになる。ただ、その場合、研究者は自身が必ずしも明確に自覚してこなかった自身の研究を暗黙のうちに動機づけている指導理念がいかなるものであり、前提している「心」についてのとらえ方、つまり「対象像」がどのようなものかをできるだけ明確にしておくことが望まれるのである。

こうしてポストモダンの心理学は基本的に多様なあり方を積極的に認めていくものとなっていくであろう。それらの様々な心理学の内実や性格を大づかみに整理していく枠組みとして、

- a 何のための研究なのかという、心理学研究を根底において支えている指導理念
- b 人間の心という研究対象をどのようなものとしてとらえているのか、換言すれば、「心」をどのようなレベルで捉えているのかという対象像

という2つを設定してみる事が可能となろう。具体的な研究法は、そうした枠組みの中で多様なものが自由に、大胆に作り出されていくこととなるであろう。

このような新たな枠組みにのっかって、これまで筆者自身がとらえてきた心理学研究のあり方を「ポストモダンを模索する多様な試み

の一つ」として紹介しておきたい。

5 1 人称的経験を資料とする心理学研究

振り返ってみると筆者自身はこれまで現実の心理学に対して常にある種の違和感を覚えてきたにもかかわらず、自分なりに描いた「心理学」に対しては、捨てがたい関心を抱き続けてきた。そうした筆者自身の関心を引きつけてきた「心理学」とはいかなる指導理念に動機づけられているのかを問うてみると、自己理解への衝動ともいべきものが浮かび上がってくる。すなわち筆者の考えている心理学とは研究者がいわばカミのごとき地位にあつて他者を専門家としての高度な技術を用いて統御していくことを目指すものとは大きく異なる。心理学とは本質的に人間の自己理解への衝動に根ざす営みなのではないかということである。

その場合、「自己理解」というものもお多岐にわたる。その一つは自己形成の途上にある青年が自身の形成過程を自ら省みてそこに深い洞察を得ていくことを目指した研究。その場合は、自己の内面を綴った日記のような記録も資料となり得るし、さらには研究への関心が明確になった時点で過去に逆上って自身の経験を記録したものを資料とすることも可能である。こうした研究方向は青年のみにとどまらない。すでに人生の盛りを過ぎた個人が、自己の過ぎてきた生涯を振り返って、それまでに自身の記録してきたものを資料としたり、さらには過去の経験を想起する形であらたに資料を作成することも意義深いことである。そうした自己自身の形成過程を反省的に想起して資料を作成する時の一つのやり方として、筆者はこれまで「エピソードメソッド」なるものを開拓してきた。そのおおよそのやり方については後に簡単に紹介しておきたいと思う。この方法は、次ぎに取

り上げる実践についての研究にも、適用できる可能性を秘めていると考えている。

1人称的経験を資料として用いる研究のもう一つの重要な局面は、広い意味での実践についての研究である。筆者自身が関わってきた教育実践をはじめ医療や福祉、さらには産業場面においても広義での人間の実践それ自体を取り上げていく研究は、これからの心理学にとって一つの中心的な課題領域となっていくと予想される。

実践的研究については従来の心理学においても一定その意義を認められてきたことはいうまでもない。たとえば1970年代に東京大学出版会から発行された全17巻からなる心理学研究法についてのシリーズでも、その第13巻は続 有恒・高瀬常男両氏の編になる『実践的研究法』となっている。だが、従来の心理学における実践的研究ではほとんどの場合研究の主体は心理学者であり、実践に携わる人は資料を提供する研究協力者の立場にとどまっていたのではないか。その点からみるなら実践的研究においても研究に従事する者自身が自らの経験を研究のための資料としていくというやり方はとられてこなかったのだといってよいであろう。ここにも「客観主義」の呪縛が色濃く認められる。こうしたやり方をとる限り、実践的研究というがそれは「人間の心」なるものについての普遍的な知見を確立していくための手段という意味しか与えられていなかったのではないか。だが、たとえば教育心理学における実践と研究との関わりを根本のところ立ち返ってその意義を捉え直してみるなら、様相は大きく変わってくる。その一つの例として筆者が若い頃小学校の先生方と10数年にわたって続けていた研究のことをとりあげてみたい。(注6)

この実践的研究を生み出した思想的基盤は正木正教授の教育心理学の立場であった。正木はその絶筆となった「教育心理学における方法と

人間」の中で、教育心理学を実践に即して研究していこうとする時、よりどころとすべき方法を現象学に求めていた。(注7)しかし、その具体的なものについては何も示すことなく世を去っていたわけだが、そうした正木の示唆に感銘を受け、自分なりに現象学に拠り所を求めて教育心理学の内実ともなるはずのものを模索していた現場人と研究者が出会うことで、この研究は始まった。すなわち『教育状況の現象学』の二人の編著者たる加藤誠一氏と筆者との出会いから始まったということである。筆者が大学院の博士課程に在学していた時期、たまたま内地研修ということで東京大学教育学部に一年間加藤氏が来られていた折、加藤氏の問題意識を知った指導教授が山下を紹介したのである。始めは二人だけで現象学や教育現実のことを語り合っていたわけだが、やがてその輪をもう少し広げていきたいと10名余りの現場人に呼びかけ、ほぼ毎月1回研究会を持つようになった。加藤氏または山下による現象学の勉強会とメンバーの一人が交互に提供する実践報告をめぐる自由な懇談という形で会は続けられた。活動の最盛期には、夏と冬の2回箱根に合宿して討議することを重ねていた。10年余に及ぶそうした討議をまとめたものが、さきに紹介した『教育状況の現象学』だということである。

教育心理学における実践的研究の一つとしてこの活動を捉えた時、そこにどんな特色を認めることかできるかを考えてみよう。まず指摘できるのは山下を除く他のメンバーは一方では自身の実践についての記述を行いつつ、他方では他のメンバーとの共同討議という形でその意味するところを研究者的関心で読み取っているということである。これはとりもなおさず自身の経験を資料として用いているという点で「1人称的手法」による研究として捉えることのできるものである。さらに注目すべきは、ここでの1人称的手法は問題意識を同じくし、現象学と

いう解釈のための共通の枠組みを媒介として形づくられた「我々」ともいべき「複数1人称」による研究活動となっているということである。この点は実は質的研究法における妥当性を高めていくための手法という問題とからみあって今後さらに深めていくに値する重要な意義を有するものと考えられる。

実践的研究における1人称的経験を資料としていくというやり方については、もう一つ精神科看護の領域における荒木氏による試みも注目に値する。(注8) 荒木氏は現在大阪府立看護大学の専任講師として活躍している新進の精神科看護の研究者であるが、大学でははじめ哲学を専攻し、その後看護師となって10年余り精神病院での看護の実践に取り組むかわら改めて教育心理学の課程に学士入学した。さらに大学院の前期課程、後期課程を終了して現在学位論文の作成に取り組んでおられる。教育心理学を学ぶ過程で現象学に関心をもたれ、現象学の視点を持つことで自身の看護師としての実践そのものを研究的に行い、そこから精神科看護の領域に従来の医療とは一味異なる新たな観点を取り入れていこうという問題意識のもとに研究と実践を進めてきたのであった。

6 エピソードメソッドの試み

上に簡単に見たような1人称的経験を資料としていくという研究方法を具体化していく過程で筆者なりに模索してきた方法の一つが「エピソードメソッド」である。まだ全くの試みでしかないわけだが、筆者の指導のもとに進められた卒業論文等での2～3の研究例を取り上げて、そのおおよその特質を紹介しておきたい。

例1 これは馬術部の部員として4年間熱心に馬の世話に取り組んできたゼミの学生がその経験を資料化しようという時筆者が勧めたやり方である。この学生は4年

次になって間もなくこのテーマで卒論を書こうと決めたのだが、入部以来の経験をどのように資料としていくべきかに迷っていた。そこで筆者は、まず自然な気持ちで過去の部活動を振り返った時、いくつか印象に残っている場面があると思う。それをどれか一つ取り上げ、その場面での馬の様子、人間の側の対応、そこで感じた自身の感情等をできるだけ詳しく書き出してみる。その際「事実的なもの」は出来るだけクールに実際に生じたことを再現するという趣旨で記述していく。それに対応する記述者自身の感じたことは欄を別にしてなるべくその時の感じをありのままに記述していく。もうその場面についてはこれ以上書けないとなったら、それを一つの「エピソード」として保管しておく。少し時間をおいてまた別の場面が想起されたなら、その場面につき同様に記述していく。こうして多くの「エピソード」記録が作成できたなら、次ぎにはそれらを読み返しながらか「研究者」の立場で、そこにどのような意味を読み取ることが出来るか検討していく。

例2 運動部(ボート部)の部活動に参加してきた一人の学生は他大学では余り例のない学生コーチという役割を1年間受け持つことになった。いろいろ苦勞もあったが結果としてはかけがえのない貴重な体験ができたと思うので、そのことをテーマとして、卒論を書きたいという。そこで過去の学生コーチとしての月日を振り返って記録を作成していくための便宜として時間的経過について一応の枠を作ってみた。まず学生コーチに指名された時の状況及びその時自身が感じたことの記述。学生コーチを始めてからは時間的

順序に従って「最初の頃」での印象深い場面を取り上げる。その場面での出来事の記述とそれをめぐるコーチ自身の心の動きについても、記述しておく。一つの場面の記録が作成できたら、次ぎに印象深い出来事、場面を取り上げていく。このようにしてコーチという役割を辞任するまで、おおよそ時間経過にそって10個余りの「エピソード」が資料として作成された。その資料について今度は研究者としての立場に立った考察を進めていった。

例3 一人の女子学生の場合。自分と母親は「一卵性母子」といわれるぐらい仲がよいのだという。そういう二人関係の形成されてきた跡を心理学的に解明するという形の卒業論文の作成を意図していた。そこで筆者は、ここでもまず最近の3～4年間として大学入学以後現在までの母との関係をよく示すと思われる出来事や場面をエピソードとして記述してみようことを勧めた。あわせて、この時期全体の母との関係の特質を簡潔に記述しておくことも勧めた。次ぎに高校3年間について、中学校、小学校高学年3年間について、さらには小学校低学年の3年間、就学前という時期区分に従ってそれぞれの時期の特徴的エピソードの記述と全体的特徴の記述とを勧めていった。この研究の場合幸い母親の方にも当該の子どもの誕生の時点から折にふれて綴ってきたいわば育児日誌ともいうべきものが残されていた。それも資料として用い、総合的な考察を試みるというやり方でなかなか見応えのある論文が出来あがった。

7 現象学の意義を再考する

心理学における質的研究法が開拓されてきたあとをふりかえてみると、現象学はその一つの基盤として大きな役割を果たしてきたとみられる。特にグラウンディッド・セオリーやエスノメソドロジー等の成立には、直接的な影響が認められる。むしろこれらの方法は現象学の様々な具体化の一つを意味しているとも見ることができよう。

現象学については筆者も大学院生の頃から真剣に勉強を始め、以後一貫して自身の学問的立場の支えとしてきたという経緯がある。そこでこの小論の終わりに、心理学研究にとっての現象学の意味についても少しくふれておきたい。

思想史的にもいえることだが、客観主義の支配してきた近代心理学にとって、現象学は認識における、とりわけ「心的なもの」の認識における主観の優位性を明確に指し示してきた。いわゆる質的研究法の方法論的基礎には現象学が指し示している主観性への信頼があることをここでもう一度確認しておきたい。実は質的研究法にとどまらない。数量化の手法、たとえばパーソナリティテストといった技法についてもその作成過程を綿密に追及していくと、訓練された個人による判断といった主観に妥当性の根拠を求めざるを得ないものであることに気づく。先に筆者が取り上げた1人称的経験を資料として用いる方法はそのあたりを積極的に活用しようとする一つの試みであったといえよう。

そのことをふまえた上で、次ぎに現象学という視点を有することが心理学研究者にとって持つ意味として筆者は「探究の基本的態度としての現象学」という見方をとってきた。周知のように現象学の基本テーゼは「先入見を排して事象そのものに立ち返る」ことである。この場合、深く考えていくと「先入見とは何か?」とか「立ち返るべき事象そのものとは何か?」という問

題が出てくるわけだが、心理学研究を実際に進めるにあたって現象学の視点を持っていると、それまで自明と思われてきたことについて、その意味をもう一度問いなおしてみようとする促しを受ける。たとえば尺度構成の手続きがすでになされているいくつかの項目を用いて調査をおこなったような時、通常では構成されている尺度のマニュアルに従って得られたローデータについて一定のスコアを出し、その数値を他の様々な要因と関連づけて分析を行ってあげればよいわけである。だが、現象学の視点を有しているとスコアに還元してしまう以前の、そもそも実際に生じている心理的事象そのものはいったい何なのかを問題とせざるを得なくなる。すると調査に協力した人は、個々の具体的質問に対してその意味するところに応答しているはずだということに気づく。そうであるなら、同一の項目であっても個々の協力者がそこに見いだす意味は多少とも個性的で独自なのではないか。そもそも質問紙調査に協力して回答しているという状況そのものの意味からして、個々の協力者により微妙に異なるものなのであろう。少なくとも心理学研究のあり方としては個々の協力者の体験している具体的状況に立ち返ってその意味するところを読み取っていくという部分も欠くことのできない側面となるのではないか。そうなると、尺度化された質問項目を用い、マニュアル通りに処理してスコアを出していくという研究方法は、高々「一つのアプローチ」でしかないことが見えてくるのである。

こうして現象学をふまえて心理学研究を行うということはすでに一定の認識論的さらには存在論的立場を選びとっているということに気づかされる。そのへんを今詳しくみていく余裕はないが、現象学の依拠する立場からみると、心理学研究の基礎となる部分は、解明したい心理的事象を研究目的に照応するよう的確に記述することだということになる。次ぎには、記述した

心理的事象が何を意味するのかを読み取っていく、その意味での「解釈」がそれに続く過程となる。こうして心理学研究のもっとも基本となるものは研究目的に対して的確な心理的事象を見いだして記述し、その意義を解釈していく営みだということになる。なおこの「解釈」という営みそのものは数量化の手法を取る研究者も実は常に行っているわけだが（たとえば因子に名前を付すという形で）、多くの場合研究者はそうした営みが「解釈」だとは十分自覚していないように思われる。数量化の手法においても事実上始終用いられている「解釈」という研究者の認識の営みについても方法論的な検討がぜひ必要であることを提起して、ひとまずこの小論は終わりとしたい。

注1 Kazdin, A.E. (Editor in Chief), 2000, *Encyclopedia of Psychology*, Oxford University Press. Vol.6

注2 ここで参照したのは次ぎの2つの文献である。

Richardson, J.T.E. (Edited), 1996, *Handbook of Qualitative Research Methods for Psychology and the Social Sciences*, BPS Books

McLeod, J., 2001, *Qualitative Research in Counselling and Psychotherapy*, Sage Publications

注3 LeShan, L., 1990, *The Dilemma of Psychology*, A Dutton Book

注4 山下栄一, 1987, 何のための心理学かー技術の学から批判の学へー, 日本心理学会第51回大会論文集

注5 山下栄一, 1993, 『自分流に生きるー人生論ノートー』近代文芸社, 第6章

注6 山下栄一・加藤誠一(共編著), 1981, 『教育状況の現象学』金子書房

注7 正木正, 1959, 教育心理学における方法と人間(遺稿), 大脇義一教授在職35年記念論文集, 東北大学文学部心理学教室, P.15

～23（正木正選集第3巻『教育的叡知』金子書房，にも収録されている）

注8 荒木孝治，2001，慢性期精神分裂病患者

への傾聴の効用について－思考障害を持つ患者への理解の変化を分析して－，大阪府立看護大学紀要 第7巻 第1号